


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 海野多枝 

学位申請者 鈴木 綾乃

論文名 日本語学習者のコロケーション習得に関する研究—動詞「する」を中心に—

【審査結果】

鈴木綾乃氏から提出された博士学位請求論文『日本語学習者のコロケーション習得に関する研究—動詞「する」を中心に—』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は、全員一致で学位申請者に博士（学術）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。

審査委員会は、海野多枝を主査に、副査として、川口裕司教授、鈴木智美教授、投野由紀夫教授、外部より秋元美晴教授（恵泉女学園大学）を加えた5名で構成された。

【論文の概要】

審査対象論文は、序論に続く第1章から第5章が本論を構成し、第6章が考察と結論、その後参考文献および謝辞が記載されており、総ページ数は344ページである。また、別冊の資料編には、分析に使用した全データ（学習者及び母語話者）が収められており、総ページ数は301ページである。

第1章から第3章は、本研究に関わる先行研究の概観である。まず第1章では、前半部分で本研究の主要なテーマである「コロケーション」の定義と類型をめぐる議論を展開している。鈴木氏のねらいは、学習者の言語習得過程で現れる特有の語と語の結び付きをコロケーションの観点から捉えることを提案した上で、コロケーションという切り口から言語習得過程を捉え、説明することにある。このためには、母語話者の言語使用におけるコロケーションをもとにした定義・類型だけでは不十分であるとした上で、語彙的コロケーション、文法的コロケーション、意味的コロケーションの3つの観点による分析手法を提起している。第1章の後半部分では学習者コーパスを用いた第二言語習得の研究手法論について論じている。従来の第二言語習得研究におけるデータ収集方法、各方法で得られたデータの特質、学習者コーパスを用いた研究方法、英語と日本語の主要な学習者コーパスの概要をまとめている。

第2章では、従来の第二言語のコロケーション習得の実証研究を、英語と日本語のコロケーション習得を中心に検討している。そして、先行研究の主な問題点として、母語話者の言語使用データに基づいて定義されたコロケーションに焦点があり、学習者独自のコロケーションにまで焦点が当てられていないこと、語彙的コロケーションのみに焦点があり、文法的、意味的な結びつきへの関心が希薄であること、学習者独

自のコロケーションを誤用として捉え、原因が母語にあるか否かという点のみが焦点化されていること、等を指摘している。

第3章では、本研究の分析対象である動詞「する」の先行研究を概観している。まず、「する」の意味とコロケーションに関する先行研究をふまえ、筆者なりの「する」の意味分類を提案している。この中で、「日常の動作等」を表す意味を「する」の中心義、「名詞＋する」という形でサ変動詞をつくる用法を中心義に近い派生義、それ以外の変化を表す意味、決定を表す意味などを派生義としている。次に、動詞「する」に関連する日本語と中国語の対照研究を広く読み込み、両言語における動詞「する」と名詞の共起、共起語の差異、共起語の品詞による誤用傾向とその原因等に関連する研究をまとめている。

第4章では、第1章から第3章を総括した後に、本研究の目的、研究設問、使用したデータの収集・分析方法が詳細に述べられている。本研究の中心的な研究設問は、①日本語学習者と日本語母語話者はそれぞれ、動詞「する」と共にどのような語を用いるか、②母語話者と比較して、学習者の「する」の使用にどのような特徴が見られるか、の2点である。データとして、『日本語学習者言語コーパス』（東京外国語大学大学院グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（平成19-23年度））を使用している。このコーパスに収められたデータのうち、台湾の大学で学ぶ学習者102名と、日本語を母語とする大学生59名のデータを分析対象とし、すべての動詞「する」を抽出して分析した。分析対象とした「する」の語数は学習者が3816例、母語話者が1170例である。学習者のデータについては、「現代書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」（国立国語研究所）と母語話者へのアンケートを用いて許容度の判定を行っている。

第5章では本研究の分析結果が述べられている。4章で述べた方法で抽出した用例を、語彙的コロケーション、文法的コロケーション、意味的コロケーション、の3つの観点から分析し、母語話者との比較を通じて、学習者の「する」のコロケーションの特徴を緻密に記述している。語彙的コロケーションの分析では、キーワード分析という手法を用いて、「する」と共起する高頻度語と低頻度語を分析し、学習者と母語話者の比較を行っている。結果として、学習者が母語話者に比べて「する」と共に特定の語（例えば、「勉強」「留学」「心配」「びっくり」「緊張」「食事を」「準備」「参加」「注意」「たり」など）を過剰使用している点や、学習者のほうがより規範的な用法を用いている場合もあること（例えば学習者が「～たり、～たりする」を過剰使用するのに対し、母語話者は「～たりする」を用いるなど）、逆に、「お会い」「お願い」「お借り」などを過剰使用して「お＋動詞連用形＋する」のパターンをあまり使わないこと、など、示唆に富んだ特徴の記述がなされている。

文法的コロケーションの分析では、「する」との共起語を品詞ごとにラベリングし、「する」と共起語の統語的關係に着目した分析を行っている。助詞については、Tスコアを用いて結びつきの強さを分析している。結果として、学習者は母語話者よりも名詞と動詞を特徴的によく共起させている点、助詞については、「を」「たり」が「する」とともによく使用されるのに対し、母語話者はこの2つに加えて「に」「と」をもよく使用している点、学習者は「お・ご＋動詞連用形＋する」を過剰使用している点、

などの傾向が指摘されている。

意味的コロケーションの分析では、「する」の意味分類を提示し、学習者と母語話者がどのような意味で「する」を用いているか、また、「する」の共起語の意味はどのように分類されるか、との独自の観点から分析を行っている。分析の結果、母語話者は「する」の中心義と派生義の両者を使用するのに対し、学習者は「する」の中心義を過剰使用、派生義を過少使用する、との特徴が見出された。共起語の意味として、学習者はタスクの内容にかかわらず大学生生活、日常生活に関わる語を多く使用するのに対し、母語話者はタスクによって使用する語の意味分類が異なるとの違いも見出された。以上を総合し、学習者は母語話者に比べて、中心義を、量的にも、共起語の意味範囲の面でも、過剰使用しており、派生義を過少使用していると推測している。

第6章では、第5章で行った3つの観点からの分析を総合し、学習者が動詞「する」と共起語との結びつきを習得する過程について、語彙的、文法的、意味的結びつきの観点に基づき、「中心義コロケーション」と「派生義コロケーション」という独自の概念を提案しつつ、考察している。また、今後の展望と課題、日本語教育への示唆にも言及している。

【公開審査の概要】

公開審査は、2013年12月24日(月)10:10~11:40に、東京外国語大学事務棟の中会議室において実施された。まず最初に、鈴木氏からパワーポイントを用いて博士論文の内容説明があった。その後、各審査員から質問がなされ、それぞれに対して鈴木氏から回答があった。

【博士論文の評価】

本論文は、日本語の学習者言語について、科学的手法を用いて第二言語習得研究を行った意欲的な業績と言える。特に学習者言語におけるコロケーションを詳細に分析した研究は日本語教育学分野では類例がない。鈴木氏が日本語教育学分野でコロケーションに焦点を当てて研究を進めるに至った経緯は、既に学部時代に行った語彙の誤用の研究に端を発している。その後、修士、博士と長い年月をかけてそのアイデアを本研究に昇華させてきたものといえる。研究テーマの重要性と妥当性は審査委員全員が認めるところであった。鈴木氏は、第1章から第3章の中で、国内外の先行研究を広く渉猟し、そこに現れた基本概念を網羅的にまとめ、学習者コーパスによる研究方法についてもバランスよく解説している。第5章の言語分析においては、優れた方法論に基づきながら研究を展開している。自ら積極的に学習者コーパス(約20万語)の構築にも関わり、タスクごとの分析や母語話者との比較など、多面的な観点から、実証的なデータ解析と統計分析を通じて、具体的かつ複眼的な考察を行っている。

なかでも審査委員が高く評価したのは、以下の諸点である。①国内と海外のコロケーションの先行研究を丁寧にまとめている点、②従来とは異なる視点からのコロケーション研究を打ち立てている点、③鈴木氏自身もコーパス開発に参加し、データを熟知した上で分析を行っている点、④コーパス言語学の分析手法を踏襲し、統計的手法も用いつつ、コーパス駆動型(corpus-driven)のアプローチで当該コーパスに現れる言語

現象を徹底的に調べ、分析結果に客観性を与えている点、⑤適切な手順をふまえて明快な記述を行っている点、⑥コロケーションという観点から第二言語習得を説明する理論構築を試みている点、⑦綿密なデータ記述を通じて、今後の日本語教育研究にとって有益な材料を多く示し、今後の日本語教育研究への示唆をも論じている点、などである。論文の論旨展開や文章表現も概して明快であるとの評価であった。

一方で、いくつかの改善点と、今後に向けての課題が指摘された。①まず、方法論的観点からは、本研究ではコーパス言語学の方法を踏襲し、統計分析を行っているが、若干の統計処理（クラスター分析、ギロー値）上の問題が指摘された他、Granger の対照中間言語分析(Contrastive Interlanguage Analysis)の手法を用いるとしつつも、母語話者を規範とするか否かの軸点が明確でない部分があるとの指摘がなされた。②本研究ではコーパス駆動型のアプローチにより、「する」との共起語を網羅的に分析対象としているが、日本語学的な観点からの疑問として、複合語（サ変動詞、副詞+する）をもコロケーションとする捉え方や、実質語と機能語を同等に扱う手法に対する疑問が呈された。また、代動詞的な用法を、コロケーションとしてどのように考えるかという点も今後の課題として挙げられた。③語彙的/文法的/意味的コロケーションの3つの観点は、コーパス分析の手法としては妥当であるものの、第6章の考察の部分で、習得の段階を示す概念としても用いられており、この点に若干の飛躍が感じられる、また、意味的コロケーションについてはもう少し掘り下げた議論が必要であるとの指摘がなされた。④本研究では、誤用の分析はあえて行っていないが、学習者の産出した文に見られる誤用例は興味深い現象を示しており、もう少し丁寧に個々の誤用の分析を行うという視点も必要ではないかとの意見も出された。⑤本研究は探索型の研究であり、考察の部分で理論構築を試みている点は評価できるものの、コロケーション習得と中間言語の関係についてももう少し考察を深められればなお良かったとの指摘もあり、今後焦点を絞った仮説検証型の論考が生み出されることを期待する声もあった。

以上の課題は、日本語学、コーパス言語学、第二言語習得論等の複合領域にまたがる当該研究課題の性質と問題設定にも関連するものであり、裏を返せば鈴木氏が複合的な領域にわたる研究に意欲的に取り組んだ結果生じたものともいえる。こうした審査員からのコメントは、もちろん本論文の質と水準に直接的に関わるものではなく、むしろ今後の研究の発展に期待しつつ、叱咤激励する意味を込めて述べられたものであった。

最後に付言しておくが、鈴木氏は本博士論文の他に、共著の著書2点、学術論文9点を執筆し、学会においても5回の研究発表を行っており、既に研究者として独り立ちしていると言える。

【審査委員会の結論】

本論文は内容、構成ともに堅実なものであり、本学の博士号授与要件を満たしている。公開審査において、鈴木氏は、審査員からの細かな質問に対してもすべての確に応答し、本論文の限界及びその改善方法についても明確に理解していることが示された。以上の論文評価及び最終試験での質疑応答の内容から、本論文は第二言語習得研究の理論面及び日本語教育学の実践面の双方に貢献しうる優れた論考であり、鈴木氏が当該分野において学術的な貢献をなし得るだけの自律的な研究者としての資質を十

分に有していることが確認された。以上により、審査委員会は、全員一致で、学位申請者に博士の学位を授与することが適当であるとの結論に達した次第である。